
けいおん！～転生したら何故かJK～

Thalys-hiiragi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！～転生したら何故かJK～

【Nコード】

N3812Z

【作者名】

Thalys-hiragi

【あらすじ】

天界の手違いで死んでしまった松本 雪乃がけいおん！の世界に転生！？

相棒のムスタングベースと共にゆるやか部活ライフを送るお話です。

更新は毎週曜日不定1回です

転生物が苦手な方はご遠慮ください。

オリジナル主人公設定

オリジナル主人公のデータです
転生後のデータ

氏名：松本 雪乃

桜が丘高校在籍：1年2組

担当：ベース/ギターも可

誕生日：1992年4月12日（牡羊座）

身長：162cm

体重：54kg

血液型：O型

家族：姉（異母姉妹。両親はすでに他界）

趣味：アルトサックスの演奏

ショートカットの黒髪にフレームレスの眼鏡が特徴。普段はあまり自分から行動を起こそうとはしない物静かなタイプ。ただし時々律ですら驚くような突拍子もない行動に出ることがある。

使用楽器関連

ベース：フェンダーU・S・A・ムスタングベース（フィエスタ・

レッド/オフホワイト)

弦：エリクサー 14077 NANOWEB 4string

MEDIUM

アンプ：ベースアンプ：FENDER Rumble 60

イコライザー：BOSS GEB-7

ベースチューナー：BOSS TU-12EX

アルトサックス：ヤマハ製

プロローグ

俺は、唐突に目を覚ました。

「ここは・・・」

真っ白な空間

「さて、早速ですが！あなたは死にました！」

なんだそりゃ・・・

「あんた誰？」

いきなり現れたのはなんというか・・・

「女子高生？」

うん、どう見ても某四コマ漫画の登場人物だわ

「人の話聞いてる??」

「うん、俺死んだんでしょ?・・・って死んだあ!？」

死んだってどういうことだ?

「あー冷静に聞いて欲しいんだけど、いや・・・大変申し分けにくいんだけど全部こっちの手違いなのですよ・・・」

さて状況を整理してみよう。

- ・ 現在目の前にいるのは自称「神様」である
- ・ 俺は死んでいる
- ・ 俺は転生の権利を持っている
- ・ そしてこの能無し（神様）の責任である

「俺、こういう小説読んだことあるんだけど、転生して魔法を使って世界を救うとか・・・俺としてはごめんだけど・・・」

「正確には私の責任じゃないんですけど・・・私は基本的に後処理係りだし・・・」

神様（自称）は落ち込んでしまった

「で？どうしろと？」

「えーっと、とりあえず上司からは希望の世界に転生をと・・・」
「なんかこの神様（自称）は権限は弱いというか最初の勢いはどこに行ったのか・・・」

「じゃあ、変な争いのない平和な世界でお願いします」

俺がそう言つとその神様（自称）はいきなり元氣になり

「はい、かしこまりました。では行つてらっしゃいませ」

神様（自称）の笑顔に見送られて俺は次の世界に転生する羽目になった。

薄れゆく意識の中で

「ところで、どんな世界に行くのか聞いてない・・・」
そんな事を思った。

第1話「状況確認」

「・・・きて、・・・ちゃん、・・・お・・・て・・・」

俺は快い微睡眠から覚醒した

「おはよう、雪乃ちゃん、急がないと遅刻してしまうわよ」

この声は誰だ？でも知ってる

「お姉ちゃん・・・待ってえ・・・あと5分だけ・・・」

一瞬、自分で言っていることに驚愕した

寝起きは良いと自負していたのだが、それ以上にこの声を姉と認識しているところだ。

「もう、早く起きないと準備してる間に梓ちゃんが来ちゃうわよ？」
そう言っただけで姉は俺の布団をはがす

目に入ってきたのは白と黒を基調とした部屋で、オーディオラックにはジャズやロックを中心にしたCDやレコード、またそれ専用のプレイヤーなどが並んでいた。

自分の記憶している自室ではないにもかかわらずここを自室として認識している。

「ほらほら、早く顔洗って着替えてらっしゃい、下で待ってるわよ」

まてまて、どういうことだ？記憶は・・・えーっとうん、部屋の配置は分かる。

・ピピピピ・ピピピピ

これは目覚まし時計じゃなくてじゃなくて・・・って携帯？
机の上にあったスマートフォンを手に取りロックを解除。

Fm:RCZ-90D@SanLexar.ne.jp

タイトル：転生完了のお知らせ

添付ファイル：ナシ

本文：転生が完了しましたことをお知らせいたします。なおご不便な点がございましたらこのメールアドレスまたは下記の直通ホットラインでご一報ください。

直通ホットライン：9930-52-999899

担

当：アテナ一等庶務官

「担当が庶務なんだ・・・」

とりあえず転生したという記憶は見つかったしまず・・・学校に行かなくちゃ・・・。

記憶を頼りにクローゼットを開けて高校の制服に着替える。

私、高校生になったのか・・・

「一人称おかしい・・・なんか普通に「私」って出てきた・・・」

そう言えば精神は肉体に影響されるとか何とかという論文があったらしいと言っのをどこかで聞いたことがある。

- ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

「またメール？」

F m：中野 梓

タイトル：起きた？

添付ファイル：ナシ

本文：もう流石に起きてるよね？今日から高校生なのに遅刻は無しだからね。

じゃあいつもの時間にインターフォン鳴らすからね

いつもの時間、記憶が正しければあと20分弱。

「早く着替えよ・・・」

真新しい制服に袖を通してリボンを結びバックを持って下に降りる。そう言えばもうサラダ油が無かったんだっけ。

「お姉ちゃん、サラダ油がそろそろ無いと思ったんだけど・・・」
台所に入るとそこにあったのは

ヤマハ2サイクルエンジン用エンジンオイルの4リットル缶・・・。

「お姉ちゃん!？」

だめだ、お姉ちゃんは料理は美味しいのに時々大変なミスをするんだった。

「あ、油がなかったからもって来ておいたわよ?・・・って雪乃?もしかして私、またやつちやった!？」

また・・・過去にも・・・2回くらいあったのか。

記憶を探れば出てくるけど結構探す間にタイムラグがあってまだ不便だな。

朝食を食べてちゃんと食用油を台所に入れたところで

-ピンポン

チャイムが鳴った

「雪乃ちゃん!、梓ちゃんが来たみたいよー」

もうこんな時間か・・・出かけなきゃ。

第1話「状況確認」（後書き）

ご意見・ご感想ご感想をお待ちしています

第2話「新入生」

・ガチャ

ドアを開けると春なのにまだ少し冷たい空気が私の肌をなでた

「おはよう、雪乃」

ドアの外にいたのは私の幼なじみで今年から同じ高校に通う中野梓ちゃん。

とりあえず記憶を頼りにだいたい分かるな。

「おはよう、梓。今日から同じ学校だね」

彼女とは小学校が同じで中学校は私が私立にお受験してしまったため、中学は違う学校だった。

「おーい、俺たちを忘れてもらっても困るんだが？」

あ、こいつは片瀬 祐二、同じく幼なじみ。あだ名はユウ。今年から共学の高校に進学したらしい。

ちなみにうちの隣にアルアパートに住んでる。実家は大企業の社長とか何とか。

「そうだぞ、いくら学校がかわるとはいえ水臭いではないか」

こっちの背が高くて古風なのは宮本 ？。彼の実家は柔道の道場なんだけど柔道だけに飽きたらず剣道や最近ではカポエラも始めたとか。こいつも祐二と同じ高校に進学したらしい。

「はいはい、ごめんね」

とりあえず軽くあしらっておけば大丈夫なはずだ。

私と梓は両親が共にジャズバンドをやっていてそこで知り合ったのが最初だった。

もつともそれは私や梓が生まれる前の話でお姉ちゃんが小学校に入学する年だったらしいので私の生まれる1年前になるのかな。

「高校生か・・・」

高校生を2回も経験するなんて思っても見なかったので正直・・・心の準備が・・・。

しかも女子校らしいじゃないですか。

「どうした？そんなに待ち遠しかったのか？」

空を見ながらつぶやいた私に？が話しかけてきた

「待ち遠しかったわけじゃないよ。ただちよっと思うこともあつてね」

うん、たぶん君には一生分からなと思う。私だって初めての経験だったから。

「またまたあ、そんな年でもないだろうに」

うん、実年齢はそうだけどそれ以前の次元ですっ飛んでるからね

「これから入学式なんだし浮かない顔してても仕方ないよ」

梓に言われて若干ナーバス気味になっている自分をリセットした。

「そうだよね」

祐二達と分かれて梓と二人で私立桜が丘高等学校の入学式に向かった。

入学式自体はつつがなく終了したけどまだHRあるんだよね。

私の座席は梓の後ろ。

まあ適当に良い位置だけど

「じゃあ梓は軽音楽部に入るんだ」

ジャズ研はちよっとイメージと違ったから軽音楽部にしたのか・・・。

「うん！！ところで雪乃は一緒に入ってくれるよね？」

入学式で知り合った友人と話してるんだけど・・・ってなに！？連行決定？

「え・・・まだ思案中」

だつてさ、いきなり部活とか言われてもね・・・今日初めて知つたよ。

「そうだよね。松本さんだつてほかの部も興味あるよね」

うん、知り合つた早々に助けられました。

ありがとう愛川さん

まあしかし、部活をやらないのも何なのでどうした物かと考えていると

梓が突然席を立つた

「梓？」

そのままスタスタと歩いて行くと

「あの、軽音部のこと何か知ってるんですか？」

ポニーテールの子とショートカットのツインテールの子に話しかけた・・・ああ軽音部の事でも話してたのか。

「ああ、この子のお姉さんが軽音部なの」

あ、梓が暴走する。うん、16年の経験と知識から言えることだね。

「本当！？お姉さんて、パート何やってるの？」

ああ、梓が完全に暴走した・・・

「ギ・・・ギターだけど・・・」

ギターなんだ。たしか学園祭のライブだとレスポールのスタンダードだと思う。改造機じゃなければ・・・。

梓のテンションが最高潮に達しているころおいて行かれた私と愛川さんは・・・。

「梓ちゃん、周り見えてないね・・・」

愛川さんが苦笑しながら感想を述べた

「昔からテンション上がるとあんな感じだったよ。もう慣れたけど」

「まもなく、新入生歓迎会が始まります。新入生の皆さんは行動に移動してください」

校内放送が入り新入生が行動に誘導されていく。

「梓、もう友達ができたの？」

さっきの二人と仲良く話していた梓を講堂に連れて行くため

「うん、平沢 憂さんと鈴木 純さん」

ポニーテールが平沢さん、ツインテールが鈴木さんね

「松本 雪乃です」

挨拶もそこにソソクサと講堂に移動することになった

続く

第2話「新入生」（後書き）

作者「遅れたあ・・・」

雪乃「貴方が遅れるのはいつものことですけどね」

作者「ああ・・・主人公にいじめられる作者・・・だと・・・この作者不幸者！」

雪乃「はいはい、じゃあとりあえずそういうことはちゃんと仕事してから言ってくださいね」

作者「じゃあもう書いてやらないぞ」

雪乃「そうやって信頼を地に落とすのは作者さんですのでご勝手に」
作者「・・・」

作者「さて、いつも通りのスロースタートだったわけですが、なんと作者は原作しか読んでません（爆）」

雪乃「貴方映画見たでしょ？それからアニメ1期も・・・2期は残念だったけどさ」

作者「ああ、そういえば地上波やってたのをテレビが勝手に録画しててくれたおかげで見れたねえ」

雪乃「ちよつとこのヘッドフォンつけて」

作者「なにになに？なんか弾いてくれんの？」

カチャ・・・ギューン！（雪乃が最大音量でベースを弾いた音）

・・・チーン（作者が昇天した音）

雪乃（これで話が先に進める）

雪乃「さて、この作品は週1回の不定期更新となっているのですが

ある程度経ったらちゃんとした更新日を決めたいと思います。それではどうか皆さん、私のこの物語を応援していただけるとうれしいです」

「ご意見・ご感想をお待ちしています。」

第3話「新歓ライブ！」

「次は軽音部によるクラブ紹介と演奏です」

ステージの照明が付くとギターの人のMCが始まった

「どうも、軽音部です。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。私、最初軽音部って聞いて軽〜い簡単な音楽だと思ってたんですよ〜」

へ、へー……か、軽〜い音楽ね……

その後も少々長めのMCが続き……ドラムの人にスティックで殴られた!？。

「それじゃあスタート!!」

演奏が始まると私は驚いた。

だってとっても上手だったから……だと思うよ。

ああ、ギターの人とベースの人のダブルボーカルなんだ……

ギターの人はレスポールスタンダード、ベースの人はジャズベースかな、うん、改造機でなければそうだと思う。

「すごいね、梓……」

「う、うん……」

……

……

……

……

・

「軽音楽部でした。次は吹奏楽部の……」

- 放課後

「軽音楽部は、音楽準備室ね」

平沢さん達は入らないって言うし・・・二人だけか。
多少ギシギシ言う階段を最上階の音楽準備室まで、ゆっくりと階段を上がっていく。

「学校見学をしたときにも思ったけど、やっぱり良い感じの写真が撮れそうだね」

学校自体は相当古い建物だと思う。

「もー、音楽以外だとやっぱり写真にしか興味ないんだから・・・」
確かに音楽以外の趣味は写真だけださ・・・。

「そんなこと言っていると、写真部に行こうかな・・・」

最上階に続く階段を上りながら

「ああ、もう。ごめん、ごめん」

そして、音楽準備室へ

「軽音部ってここですか？」

梓が先頭で音楽準備室に入っていく。

「入部希望なんですけど・・・」

私が続けて入っていったら

「確保おおおおおっ！」

「「ギヤー！」」

何故か殺気だった部長さんらしき人に確保されました・・・

- 数分後

「えっと、1年2組の中野 梓といいます。パートはギターを少し・・・」

自己紹介になったので梓が自己紹介を始めたのだけれど・・・

「おっ唯と一緒にだな！」

この人は部長の田井中 律先輩。新歓ライブでMCをしていたギターの平沢 唯先輩にドラムスティックをぶつけた人ですね。

「よろしく願います。唯先輩！」

梓がそう言うとき、その唯先輩は・・・浮かれてる・・・

「おい、戻ってこい」

律先輩が唯先輩を戻すため声をかけたけど・・・

「じゃあ、今度は・・・」

当分無理そうなので次に私が自己紹介をすることになった

「はい、1年2組の松本 雪乃です。パートはベースを・・・」

私のベースをといて単語に反応したのは

「じゃあ漣と一緒にだ」

そう言うとき律先輩はベースの秋山 漣先輩を呼んでくれた。

「よろしく願います。漣先輩」

その頃、梓はというと・・・唯先輩のギターを使って何か弾くらしい梓の演奏を聴くのはほぼ半年ぶりなのかな・・・。

ジャラアアアアン

昔よりぜんぜん上達してる・・・。

「う、うまい」

私は・・・どうしよう、今はレパートリーがジャズしかない件について・・・

「じゃ、じゃあ次は雪乃ちゃんね」

そう言うとき漣先輩のベースを渡される・・・え？もう！？ああ、そうかもつか・・・

「じゃあ・・・とりあえず分かる曲で・・・」

うん、100パーセントとは言えないけど耳コピでふわふわ時間のベースを弾いてみることにした。

・・・
・・・
・・・

- 演奏終了

「ぼかーんとしている皆さん・・・

「あ、もしかして変な演奏で皆さんの気分を害してしまいましたか!？」

「どうしよう、失敗したかも・・・

「す・・・すごい・・・」

最初に口を開いたのは梓だった

「・・・え？」

訳が分からない・・・ほら昔からできたけど・・・やってなかっただけだし。

雪乃Side End

澪Side In

まさか、ふわふわ時間のベースパートをほぼ全部コピーできるなんて「す、すいません、聞くに堪えませんでしたか？」

雪乃ちゃん・・・すごい子が入部したんだ。

ところで・・・唯、ちよつとは練習してもらわないと新入生にポジションを持って行かれかねないぞ・・・

第3話「新歓ライブ！」（後書き）

雪乃「いや、ロングスケールって大変でした・・・」

作者「ムスタングベースばかり弾いてるからじゃね？」

雪乃「転生前はロングスケール弾いてましたよ・・・転生してからからだ小さくなった気がする」

作者「うん10センチ以上身長は下がってるしね」

雪乃「公式資料見なきゃ解説できない作者・・・」

作者「まあ、4作品同時連載していると分からなくもなるよ」

雪乃「もういいよ、モンハンでもやってなさいよ・・・」

作者「うわ、なんかひどいよ・・・」

歌織「まあ、仕方ないのではないでしょうか？」

雪乃「歌織さん！」

作者「さて、今回のゲストは、乙女はお姉様に恋してる〱群青の君〱主人公、鷺宮 歌織さんです」

雪乃「次回の更新のバトンタッチのために来ていただきました」

歌織「では、引き継がせていただきますね、無能作者さんはあっちに行ってください・・・」

作者「ほらひどい・・・そんなこと言ってるから最近リア友に無能作者って言われるんですよ・・・」

歌織「だって無計画に4作品同紙連載ですよ？バカです」

雪乃「そうかもしれないですね、これで連載滞れば本当のバカです」

作者「ああ、もう良いよ、次回から俺、ディレクター側に回るから歌織「さて、今回は作者がディレクター側に回るといので面白くなりそうです」

雪乃「次回も楽しんでいただけたら幸いです」

ご意見・ご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3812z/>

けいおん！～転生したら何故かJK～

2011年12月27日21時46分発行